

子どもを持つ意欲と実現の世代性：ドイツにおける pairfam データの分析から

山本菜月（お茶の水女子大学・院）

1. 背景と目的

本報告では、パートナーを持つこと、子どもを持つことが、選択的なものとなった社会において、どのような要素が家族形成に働きかけるかを、ドイツにおける調査データの二次分析によって検討する。ドイツは日本同様、出生率が低い水準にある。ドイツが文化的に「子ども嫌いの社会」であることや、子育てに対する経済的な負担の増大、性別役割分業観に基づく政策が長年続いてきたことなどが、少子化の要因として挙げられる。これらの諸要素を改善するため、2000年代以降のドイツ政府は両性の仕事と家庭を両立させる家族政策を打ち出し、現在出生率は上昇傾向にある（BMFSFJ 2017）。また、子どもを持ちたいと考える若者の割合、特に3人以上の多子世帯を望む割合は増加傾向にある。それと同時に、子どもをそもそも望まないと考えられる層も、親世代に比べて増加しており、多子世帯を志向する者と無子を志向する者の両極に分かれつつある。彼らの子どもの価値観が、どのような社会的属性によって規定され、この価値観がどのように子どもを持つ意欲と実現に結びつくのかを世代ごとに分析することが本報告の目的である。

2. 使用データと分析方法

本報告では、2008年から2009年に収集された「親密な関係性と家族変動（pairfam）」（Brüderl et al. 2018）調査を用いて分析を行なった。本調査の対象者は1991-1993年生まれ、1981-1983年生まれ、1971-1973年生まれの3つのコーホート、合計12402人である。そのうち、本報告では子どものいない者8210人（90年世代4302人、80年世代2897人、70年世代1011人）を対象とした。属性として、学歴、居住地域、収入、家族形態などを用いる。子どもの価値観として「子どもを持つことで視野が広がる」、「子どもがいることで若さを保てる」など、子どもを持つことに肯定的な5項目（ $\alpha=.623$ ）と、「子どもが精神的負担である」、「子どもがいることで職業上の目標が達成できなくなる」などの子どもを持つことに否定的な5項目（ $\alpha=.761$ ）を用いる。そして、理想子ども数と予定子ども数を従属変数として用い、これらの変数による多項ロジスティック分析を報告では行う。また、これらの子どもの持つ意欲が、どのように変化し、実現したかについての分析も行なう。

3. 結果

相関分析の結果、理想子ども数と肯定的な子どもの価値観および否定的な子どもの価値観の間においても、予定子ども数と肯定的な子どもの価値観および否定的な子どもの価値観の間においても、ほとんど相関は見られなかった。報告においては、変数同士の関連について世代ごとの比較を行ない、子どもを持つ意欲に与える影響について検討する。また、2016年に収集された第9回調査におけるデータも用いて、彼らの子どもを持つ意欲の実現性についても報告を行なう。

謝辞：GESIS Datenarchiv より“Panel Analysis of Intimate Relationships and Familz Dynamics“（pairfam）のデータ提供を受けました。

文献・データ

Brüderl, J., Drobnič, S., Hank, K., Huinink, J., et al., 2018, *The German Family Panel (pairfam)*. GESIS Data Archive, Cologne. ZA5678 Data file Version 9.1.0, doi: 10.4232/pairfam.5678.9.1.0.

Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend (BMFSFJ), 2017, *Familienreport 2017 Leistungen, Wirkungen, Trends.* : <https://www.bmfsfj.de/familienreport-2017>[2019.05.30]

キーワード：子どもの価値、出生意欲、少子化